

「喜悦の盈満」

第五講「カデシバルネヤの危機」

民数記13章17節～14章1節

詩篇106篇15～25節

第五講 「カデシバルネヤの危機」

一、はじめに

二、カデシバルネヤとは

三、必ずそこに到達する

四、信仰生涯の一転機

一、はじめに

詩篇106にある警戒。

神がどんなにすばらしい祝福を用意されていても、得られないことがある。
蔑み、信じず、不平を言い、聞かない(服従しない)ことによって。

カデシバルネヤは厳粛な意味を持つ問題。

そこでどのような姿勢をとるかは決定的な違いを生む。

カデシバルネヤに着く前の荒野の生活と、カデシバルネヤの後の荒野の旅行の意味は、まったく違う。

クリスチャン生活は、骨の折れる、食物も乏しいような荒野の旅行ではない。

二、カデシバルネヤとは

約束の地と旅行の地との境界線にある、約束の地の入口。

きよめられた生涯の内容をよくわきまえ抜いた上で、自分はどうしてもそれが必要であるということがはっきりわかり、どうするかを決めるまで前にも後にも進めないような状態に到達すること。

それがなければ生きて行けないという所に至れば、満たされることは必定の法則。

ないよりあった方がよい、と考えるような状態ではない。

三、必ずそこに到達する

正しい信仰生涯を歩んでいると、必ずそこに到達する。

何年たってもそこに到達しなかったら、どこかで横道に入っている。

それがなければ自分は生きて行けない、というところ。

それは理論の結論ではなく、必要である。理論は必要には間に合わない。

ほんとうに求めている魂にとって、カデシ到着、カナン入国は必要事。

そしてそのように求めるならば、必ず与えられる。

四、 信仰生涯の一転機

そこに到達し入国しようとするときには、必ず多くの妨害物がある。

不信仰、無知、主知主義、偏見、傲慢などによって不可能と思わせ断念させようとする。

窮屈だと思ふ人がいるが、窮屈なのは中途半端だから。
自由になろうと思ったら、きよめられるほかに道はない。

信仰的態度を取らなかった後の生涯がどうなるかを正しく知る。

それは光に背を向けることを意味するから暗さが増し加わり、導きもなくなり、恐れや不安に満ちたさすらいを意味する。

まとめ

「きよめ」とは、

そこに入る境界線の地、カデシバルネヤがある。
そこで正しい信仰のステップを取るなら、必ず入ることができる。